

【書評】

福田恒存著・福田逸編・国民文化研究会編
『人間の生き方、ものの考え方
学生たちへの特別講義』

(文藝春秋, 2015年2月, 206頁)

渡邊 久美 (医学部教授)

福田恒存は、言わずと知れた昭和思想界の巨匠であり、シェークスピア戯曲の名訳に触れた読者も多いことだろう。その人物が、昭和37年から昭和55年にかけて九州に出かけ、全国の大学生たちとの合宿での特別講義を収録したものが本書である。学生向けの講義であるため、読みやすくわかりやすい。普段、何となく意味がわかったような気がして使っている言葉も、正しくその根本から歴史を学び、文化の違いを知って用いる必要があることを痛感させられる書籍であり、大学において学び始める学生に手にとってほしい一冊だ。初年度教育プログラムなどで、日本語技法の習得や情報整理の仕方を学ぶ際の副読本として、是非活用していきたい書籍である。

筆者は看護学の中でも精神看護学を専門として教育研究に携わっているが、看護職に限らず、対人援助に携わるものとして「人権擁護」の観点は重要であり、その人権については、もともと基本的人権として日本国憲法にも謳われている。しかし、その日本国憲法が成立した経緯を見ると、非常に拙速に決めざるを得なかった背景があり、そもそもが、敗戦後に押し付けられたものであるとの見方を、看護教育において、どう扱えばよいだろうか。人権擁護の観点から、精神保健福祉における倫理的ジレンマや課題解決に向けた看護の役割を考察する際、民主主義の起源を踏まえた人権の概念や変遷を学ぶ必要性があることを、本書は後押しする。

また、私たちが人生を送る現代社会において、近代の出発点が、西洋思想から流入してきた民主主義やヒューマニズムという概念に晒された後、何の疑問もなく、当たり前のように流布していることに本書は警鐘を鳴らす。著者は、西洋思想における民主主義と、日本における民主主義は違った意味で使われていると指摘する。「今日私たちが使っている言葉はほとんど全部と言っていい程、西洋の言葉から翻訳されて来たものであります。これは驚くべき事であって、私たちの言葉の語彙の中から、西洋から来た言葉を抜いたら一日も暮せない」と述べ、「文化」という言葉一つとっても、西洋と日本とでは違った意味に使っていることに我々が気付いていないことにも言及している。

もしも、違った意味で用いているということがわかれば混乱はおきないが、自覚がないために混乱が起きているとの主張には、注意深く耳を傾ける必要がある。わかっておくことで、すぐに解決が難しくても、よい方向に対処していくことができる。諸外国との付き

合い方を考えていく際にも、決して西洋一辺倒に神のごとく追随するのでもなければ、単に押し流されるのでもなく、日本人の独自性や特性をより凝縮し、発展させながら、世の中の課題解決を図っていくことが必要である。日本はこれまで歴史的に、何度も繰り返し異文化を取り入れて自分たちのものにしてきたが、圧倒的な西洋の力に押されて封建社会が崩壊し、西洋式民主主義を取り入れてきた明治以後の日本の中に、現代社会の混乱の根本が潜んでいるのではないだろうか。それまで、村社会で包摂されていたものや大家族主義など、近代において激変したものは大きい、その中で最も大きなものは何であろうか。ヘーゲルの弁証法に見る正・反・合のように、日本独自の止揚が起きる状態になるには、まず、私たちの母国語である言葉を守っていかなければならないことに本書は気づかせてくれる。グローバル化の流れにより、学術領域においても片仮名用語なしで説明できない現実があるが、言葉が人間をつくり、人生を意義あるものにし、歴史を変えていくのであり、言葉に生命を見いだす視点を学び取り、そのような教育のあり方を模索し続ける必要がある。

精神看護の教育に視点を移すと、精神看護臨床の場においてしばしば言われる「自分自身が看護の道具になる」ことが、一体どういうことなのか、考える足がかりとすることができる。本書は看護の専門書ではないものの、人間精神のあり方を探究していることから、精神看護に多くの示唆を与えるものとなっている。例えば、道具をめぐる話題では、「人を道具扱いする」というと軽蔑の意味にとるのが普通だが、そうではなく、道具を「ものと心が出会う場所」と捉えていく。いかに職人が道具を大切にすることに触れ、大工道具や万年筆などを「手足の延長」とし、いかなるものも必ず私たちの心がそこにあり、私たちの精神や心の癖を受けて存在するのだという。確かに、音楽家にとっては、楽器はただの物体ではなく、自分の心が出会う場所であり響き合う大切な場所であると感じるだろう。しかし現代科学では、やはり楽器は物質的にみると同じ組成である。モノに心が入り込み存在するといっても、科学で測定できない微細なエネルギー流体は、現代の精神看護の守備範囲で伝えることはできない。また、様々なモノが安価で簡単に手に入るようになり、大量に消費されていくモノの中に自分の心を見いだすことも難しい。著者の述べる感覚について、世代を越えて共有し難くなった現代では、看護者自身の感性を育むために、真の芸術に触れる機会の提供も取り組んでいく必要があるのではないだろうか。

精神科医療の主流である薬物療法に目を向けてみると、その基盤に主治医と患者との関係性があることは臨床家たちの偽らざる実感であり、関係性を離れての治療は成り立たないことは誰しもが感じるところである。人生そのものを道具化し、見えない偉大なる存在との関係に自分を捧げつくすような聖人の域に到らない凡人においても、“ものはすべて心を離れては存在せず、心そのものである”という著者の言葉を改めて問う意義は十分にある。来る近未来におけるAIとの付き合い方も、我々は試されることになるだろう。精神看護の教育研究においては、AIロボットを“道具扱い”するか、“心が出会う場所”と捉えるかが、問われている。現にあの小惑星探査機「はやぶさ」にロマンを感じた人の中には、

はやぶさを単なる道具ではなく、そこに宿る何かを感じて、出会った人もいないのではないだろうか。生命は有形無形のものに宿り、“言葉というものは（中略）自分の生命そのものである”ことを認識し、自分を道具とする看護者として、心の容器やアンテナの精度を高める姿勢を養い続けたい。

著者福田恆存の生きた時代は、日本国家が欧米の物質文明と対決して戦い抜いた激動期から、敗戦の反動で国家が自己喪失過程に突入していこうとする混乱期にあった。恆存の存在がなければ、今頃、私たちが日々使っている日本語はすべて片仮名になっていたとも言われており、時流に抗して追究し続けた問題は古びるどころか、より鮮明になっている。著者の鋭い指摘は、神を失い、ヒューマニズムが浸透する現代社会に真っ向から立ち向かうものである。「皆さん誰しも間違えていることがあります。それは、歴史を学ぶ、言葉を学ぶ、自然を学ぶという風に思っている。そういう考え方は間違っているのです、われわれは歴史に学ぶのです。歴史から学ぶのであって、歴史を学ぶではありません。」との言説が、すぐに物事がわかることを学習成果として求める姿勢を戒めてくれる。看護を学ぶ者として、患者や優れた先人から学びとっていくことのできる自己の人格を修養する姿勢を身につけ、精神看護学における学術的探究心と、患者との間に交わされる言葉一つ一つを丁寧に吟味して発することができるよう、多くの学生が著者の問題意識を解し、関心を持つことが期待される。